

永田斉子（リュート奏者）

今回のプログラムは、オランダの作曲家 C.ホイヘンスを軸として、周辺地域の作品も含めて構成してみました。

リュート奏者であった E.アドリアンセンは、1584年アントウェルペンにて曲集《音楽の牧場》を出版、この曲集は1600年まで改編しつつ版を重ねます。イサベル大公妃に捧げられた「美しい女性のためのアルマンド」や、「前奏曲」「アルマンド」「ガリアルダ」などのリュートソロ曲の他、リュート伴奏つきの4声の声楽曲が数多く収録されています。J.プランソン作曲のフランス語の歌曲「うるわしき五月の朝露が」はその中の一曲です。

「恋人よ、もし君の心が」は、フランスの作者不詳の歌「若い娘」の旋律に、16世紀の詩人ジル・デュラン・ド・ラ・ベルジュリーによる詩をつけた替え歌で、1603年に出版された J.B.ブザールの曲集《音楽の宝庫》に収められています。

C.ホイヘンスは、オランダ独立に尽力したオラニエ公の王子の秘書官であると同時に、詩人、リュート奏者、作曲家であり、画家レンブラントと交流があったことも知られています。フランス国王アンリ4世の宮廷音楽家、P.ゲドロンの憧れていたのか、ゲドロンが作曲した旋律に自作の詩をのせた替え歌を残しています。そこでホイヘンスに先立ち、P.ゲドロンの宮廷歌曲から「ある日恋するシルヴィーは」をお聴きいただきます。

さて、C.ホイヘンスは1647年パリで《聖と俗のパトディア》を出版しますが、その中に収められている「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」は、歌の旋律と通奏低音というバロックの様式で作曲されています。「あなたはそこに、美しい瞳よ」は、リュート・タブラチュアで伴奏譜が書かれており、曲集ではなく詩集の中に楽譜が残されているという、やや特別な位置づけにある作品です。

R.バラール2世は、楽譜出版業者ル・ロワ＝バラールの初代 R.バラールの次男にあたり、少年国王ルイ13世のリュート教師でした。宮廷バレエのための作品が多く、「前奏曲」はその入場曲、「天使の踊り」「村のブランル」も舞曲の一種です。

N.ヴァレはフランス生まれのリュート奏者ですが、オランダに移住し、1615年に《ミューズの秘密》を出版しました。移住の理由は明らかではないものの、宗教的なものであった可能性が高いと考えられます。鐘を模倣した「村のカリヨン」と当時の流行曲に基づく「菩提樹の下で」が明快な曲調であるのに対し、「女乞食のファンタジー」では一転して半音階の旋律による不穏な雰囲気が漂います。

最後は、フランス宮廷に仕えた M.ランベールの《歌曲集》(1689年出版)から「愛しい人の影」と、手稿譜より「楽しもう、甘い安らぎを」を演奏してこのコンサートを終わることとします。